

# 小笠山の礫層

柴 正博



図1 小笠山東麓で見られる海底谷を埋め立てた岩井寺礫層：右の白い部分は海底谷側壁斜面の砂礫層



図2 小笠山神社参道のデルタ前置相の小笠山礫層

小笠山は、前期更新世～中期更新世前期（約180万～約40万年前）の時期に、赤石山脈の大規模隆起とともに、天竜川または大井川からの砂礫によって形成された海底の三角州や湖底、河川の扇状地で堆積した地層からなります。その東麓には、海底の谷（チャネル）をつくり埋め立てた礫層（図1）や、デルタ（三角州）の傾斜する前面斜面に傾斜しながら累積した礫層（図2）、河川の扇状地で堆積した礫層など、さまざまな場所に堆積したと思われる礫層が見られます。

本号で紹介した「六枚屏風」は、図1の海底チャネルを埋め立てた礫層（岩井寺礫層）で、天竜川からの砂礫からなります。図2のデルタの海底の前面斜面（前置面）で累積した小笠山礫層は東麓に広く分布し、大井川の砂礫からなります。図3の横須賀礫層は、大井川のつくった扇状地（河川の河口部の陸域）に堆積した礫層で、小笠山西麓に広く分布します。この礫層には洪水のときにできた後背湿地にたまつた砂層や泥層が薄くはさまっています。



図3 小笠山西麓の扇状地に堆積した横須賀礫層